



開發へもつと努力を

野村鑛業株式會社
社長 山本正志

私共は、小學生の頃から、日本は國土が狭く、資源に恵まれなくて貧乏な國であると言ひ聞かさ
れ、上級學校に進んでもそのように信じさせられて來ました。この考え方は爲政者も、學者も、實
業人も、教育者も、軍人も一致していたようです。なかならず、金屬資源に至つては極めて乏しく
海外に依存しなければならぬといふやうにいわれていたやうですが、果してそうでしょうか。

私は、日本はある種の資源に恵まれない事（この事は各國それぞれ共通の事情に置かれてはいる筈
です）は事實ですが、或種資源については極めて恵まれた國であると信じています。すなわち、先
ず狭いながらも地力に恵まれています。瑞穂の國の名に背かず、千古の昔から米の連作をして大し
て地力は衰えていないではありませんか。第二には、水力電源です。私共が電力不足に常に悩ま
されているのは、爲政者も經濟人も、この自然の寶庫を活用するための工夫と努力が足りないから
だと思います。

その他の生活物資も必ずしも乏しいのではないと謂えましよう。それだからこそ、狭い地域に八
千万からの人間が兎にも角にも生活し得るのではないでしようか。

地下資源、特に私共に縁の深い金屬資源について、一般に我國は極めて恵まれていないから、その
多くを海外に依存せざるを得ないのだというのが定説になつてはいるやうですが、私は決して恵ま
れていないとは斷言出來ないと思ひます。恵まれていないというのは探査の技術と努力とが遺憾なく
發揮されてないからだと信じます。特に爲政者達（資源擔當官を指すものではありません）が地下
資源の開發に關して極めて冷淡であるからだと思います。ある先輩から聞いた話ですが、第一次大
戰の終末を處理したヴェルサイユ會議に、各國の多くは講和使節の隨員として地下資源の權威者
を帶同したのに、戰勝國の我國は、一人の地下資源の専門家を派遣しなかつたために、僅かに南洋の
燐鑛資源を得て満足したといふ事です。

この無關心振りは現在もお、繼續してはいるのではないでしようか。第一次、第二次世界大戰は
地下資源、特に石油の爭奪戰だといわれています。この考え方を以てすれば、第三次大戰が起ると
すれば、石油のみでなくウランニウム（ウラン）の爭奪戰に展開するといふ事が出來ましよう。

爲政者も資本家（廣義の）も速効の現われぬ地下資源の開發には乘氣薄ですが、道路建設とか
電源開發とか、または娛樂に類するいわゆる消費經濟の施設等、ある種の利權の伴う面には驚くほ
ど熱心なのは何故でしよう。

私共、地下資源の開發と取組んでゐる者は、この際にもつと各層の啓蒙に協力して當るべ
きだと提唱します。

日本鑛業協會誌（第五卷第十號）

十月號目次

（巻頭言）

☆開發へもつと努力を……………山本正志…一

☆鑛山企業に於ける資材管理の諸問題……………大沢彌太郎…二

☆昭和二六年度に着鑛した富鑛部及び新鑛床について……………後藤有四郎…八

☆昭和二十七年上半年（一月—六月）銅、鉛、亜鉛、需給概況について……………調査部金屬課…一四

☆國際原料會議（IMC）報告書から……………三

▽鑛業協會總會……………三

▽協會だより……………三

▽（鈦山の科學管理）……………三

▽鑛山から神樣藝を追放しよう……………三

▽ニュース……………三

▽資料……………三

〔表紙写真〕 神岡鈦業神岡鈦業所鉛熔鈦炉……………三

および前床